

神庭重信 著
思量と願い
精神医学の風景

神田橋條治

本年3月、神庭重信教授は、九州大学医学研究院精神病態医学分野を定年退官なさいます。先生の御尽力により、歴史と伝統の教室は若々しく蘇り、今の勢いになりました。同門に連なるものとしての感謝は、言葉に尽くせません。

退官を期して先生は、直近の数年間に書かれた言葉を一冊に纏められました。表紙にミレーの「種まく人」を配されたのは、先生の「心意気」です。「思量と願い」という物静かな表題とは裏腹に、情熱と熟慮と呼びかけの言葉群です。

次々に繰り出されるメッセージの広さと深さに眩暈が生じるのを避けるべく、先生の世界に入るための、読書手順を提案します。手に取られたら、まず目次から、3つの「コラム」を探し出してお読みください。身近な雰囲気が伝わってきて、先生への人としての仲間感が生まれます。次いで「あとがき」をお読みください。本書に託した先生の思いが沁みてきます。「人生の旅路で、ある道を選ぶということは、ほかのある道を選べないということに他ならない」という文に出会って、これは先生が九州大学からの招聘を受けられた際の覚悟でしょうが、「あとがき」全体のなかに置かれると、すでに幼い時から、折々の節目に先生の決断を支えた文言、だったのかもしれないとの連想が湧き、こちらの感性が変容し、先生の文章が音を伴う「コトバ」として聞こえてくるようになります。

次に末尾の「第六部『医学と福音』より」を、ぜひお読みください。先生はキリスト者です。先生のすべての人生の核にその姿勢があり、本書の隅々にそれとなく行き渡っています。同じ言葉が二回登場

しています。「命とは何か、命に違いはあるのかと懊悩する私たちの意識のなかに、神の存在が現れているということではなかろうか」。懊悩を常の事として「受苦する」姿勢を感じ取ることで、先生の言葉を受ける魂の準備が整いましたので、ようやく「まえがき」をお読みください。臨床・研究・教育・国際交流と幅広い先生の活動を、まとまりある精神世界として理解できましょう。あとは目次から、皆さんを誘う項目を選んで先生と対話する気分になってください。

読み進む途中で連想が湧きました。「速読は空しいなあ」。速読は情報の収集です。そのための本は電子書籍に最適です。ページをめくる際の手軽さが速読と一体化します。この本は「…と語り合う」を意図した「呼びかけ」です。呼びかけに応答しながら、ページをめくる指の作業に肉体の参加の感触があります。ふと気付きました。「臨床とは相手のいのちへ参加する行為である」。小躍りする気分が伴います。この小さな洞察が、医療と医療者が最近の抑うつ気分から脱出するのに役立つかもしれません。「治療」です。

この本は一貫して先生からの「参加」「呼びかけ」であり、「臨床家」のモデルの提示でもあります。内容紹介の紙幅が無くなりましたが、これでいいと思います。ありがとうございました。神庭先生。

(伊敷病院)

●四六判 282頁 2019年1月 定価 2,400円
+税 九州大学出版会